啓蒙９９の狩人が発狂しているのは間違っているだろうか

ケツに腕を突っ込んで魔石を引き抜く変態

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
Ａ：間違っていないがオラリオにいるのは間違っている

目　次

啓蒙９９の狩人が発狂しているのは間違っているだろうか　――　1
つまらないものは、それだけでよい武器ではあり得ない　――　12
知ってるもの。夜の次は朝だって　――　21
異端の鍛冶師は狩人の夢を見るか　――　31

啓蒙９９の狩人が発狂しているのは間違っているだろうか

エイナ・チュールはギルドの受付嬢だ。
ダンジョンに挑む冒険者たちのため、日々せっせと働いている。
今日も一人でも多くの冒険者が無事に帰るよう、張り切って受付に立っていた昼下がり。
彼女の、いやギルドの頭痛の種は入り口を蹴破って現れた。
「ヒャハ、ヒャハッ！　ヒャハハハハハァーッ！」
突然の事態に何事かと視線が集まる中、ソイツは狂笑していた。
分厚い聖布を赤々と汚す大量の返り血。
装備者の理性を疑う金色三角のイカれた兜。
極めつけは肉片がこびりつくどデカい車輪。
誰が見てもまともではない、狂人の類がそこにはいた。
「私はやりました、やりましたぞ！　穢れた怪物共を、潰して潰して潰して、ピンク色の肉塊に変えてやりましたぞ！
どうだ、怪物めが！　如何にお前が凶悪だとて、石と肉片に成り果てれば、何ものも食い殺せないだろう！
すべて内側、粘膜をさらけ出したこの姿こそが、おぞましい貴様らには丁度よいわ！
ヒャハ、ヒャハッ――――私はやったんだあああああああああああああああっ!!
ヒャハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハァーッ！」
狂人は血の滴る背負い袋を高々と掲げ――換金所へ全力でぶん投げて笑いながら走り去っていった。
「……エイナぁ、どうしよぉ。また色んな所が血塗れだよぉ……」
「……掃除、するしかないでしょ。私達はギルド職員なんだから……」
同僚のミィシャが泣き言を漏らす隣で、ひくひくと顔を痙攣させるエイナはずれた眼鏡の位置を直した。

一部始終を眺めていた冒険者たちは、なんだアイツかといつもの日常に戻る。
そう、ソイツはオラリオでは特に珍しくない。
どこにでも現れる会話が一切通じないヤツ。そう認識されている。
その時点で十分おかしいのだが、誰もそう思わないほど長い年月、ソイツはオラリオにいた。
姿を変え言葉を変え、好き放題やりまくっていた。
ギルドは頭を抱え、冒険者は新人の手荒い歓迎がわりにソイツと接触させ、神々は爆笑する。
オラリオの人と神は、愉悦と嫌悪と興味と諦観と快楽と呆然と称賛と畏怖を携え。
いつの頃からか、ソイツを『頭のおかしいアイツ』、もしくは『関わってはいけないあの人』。
――――あるいは【狩人】と、呼ぶようになった。

＜●＞　９９

ベル・クラネルは新人の冒険者だ。
ダンジョンに出会いを求める、そんな青臭い夢見がちな考えでオラリオに来た。
そして本当にダンジョンで一目惚れをしてしまった少年は、今朝出会った街娘のすすめで『豊饒の女主人』という飲食店を訪れていた。
美人の従業員にドギマギし、値段に驚倒しながら食事をしていると
――ギシィッ！　と、やけに重苦しい床の軋む音が店内に響く。
びっくりしたベルが振り向くと、そこには黒い様相の男がいた。
薄汚れた首巻きを垂らす男だった。
なぜか目元を包帯でグルグル巻きにした男だった。
普通に危ない抜身の斧を堂々と手に持った男だった。
男はギシギシと床を踏み鳴らして、カハアッ、と蒸気を吐き出した。

明らかにヤベー奴だった。
「むぐうっ!?」
あからさまに危ない男にベルはむせた。驚きで喉が詰まりかけ、ドンドンと胸を叩く。
え、なんで？　なんであんな見るからに危なそうな人がこんな所に!?
混乱するベルを他所に従業員の一人が気付き、早足で男の下に向かう。
猫人（キャットピープル）の少女は元気よく営業スマイルを浮かべた。
「いらっしゃいませニャー！」
「……匂い立つなあ……」
「ご注文はなんですかニャー？」
「堪らぬ匂いで誘うものだ」
「いつものメニューですニャー？　かしこまりましたニャー！」
「えづくじゃあないか……」
「代金は前払いとなっておりますニャー！」
「ハッハッハッ……ハッ、ハハハッ！」
「それでは奥の席へどうぞですニャー！」
え、なんで会話が成立しているの？
ハラハラ見ていたベルは従業員の少女に戦慄を禁じ得ない。男は男で懐から有り金を全部差し出し、促されるまま店内に入った。
カウンターの端にいるベルの、角を挟んだ隣の席へ。
「……えっっっ!?」
顔を硬直させるベルの横に男はドカリと腰を下ろす。そのまま首をベルの方へスライドさせ、ビビる少年にニイィと犬歯を剥いて笑った。
「……貴様、狩人だな」
「はっ、えっ!?　いやあの、僕はそのっ!?」
「ああ、ダンジョンは普通じゃあない」
「えっ!?」
「……躊躇するなよ。姿が見えたら、それはもう怪物……そうでなく

とも、やがて怪物となるのだからな……」
「そ、それってどういう……」
「ハハハッ、ハハハハハハハッ！」
「あ、あは、あはは……？」
男は言うだけ言って、正面に向き直る。
なんなんだろう、この人。一体どうすればいいんだろう。
ベルが動揺しどうしようか迷ってる間に、男は給仕された料理を無言で食べ始めた。
「ベルさん、その人の事は放っておいていいですよ」
「え、でも」
「その人はオラリオでも有名な話の通じない人ですから」
「そ、そうなんですね……」
「はい、そうです！　ですからその人のことはおいといて、私とお話しましょう！」
男のメニューを持ってきたシル・フローヴァに流されるまま、ベルはぎこちなく話し出す。
しかし男の存在感が強烈過ぎて、正直何を話したかまったく覚えていなかった。

「雑魚じゃあ、アイズ・ヴァレンシュタインに釣り合わねえ」
その声と同時に白い獣が走り去っていった。
【狩人】は気にしない。それは狩るべき獲物ではないのだから。
しかし頭を掻き毟る気色悪い咆哮の主は、どうやら酔っている。
酔っている――血に酔った獣。酔いは即ちそれにしか繋がらない。
ああ、ならば【狩人】はどうするだろう。悪夢を彷徨う【狩人】は、きっと己の遺志であろう言葉を吐く。
「獣、獣、獣……どこもかしこも、獣ばかりだ……貴様も、どうせそうなるのだろう？」
「アァッ？」
灰色の獣を融けた瞳に捉え、【狩人】は立ち上がる。狩りを全うする

ために。
だが灰色の獣もまた獲物ではない。故にこのままでは保てない。
啓蒙が脳液を揺さぶる。【狩人】の世界が歪み、崩壊し、また立ち戻る。
斧はいつしか、杖となり。目元を覆う包帯はバケツのような兜に取って変わった。
「ほう、面白い。連盟を敵に回すか」
「何を言ってやがんだてめえは。喧嘩売ってんのか？」
「ならばお前は獣だ！　穢れた汚物というわけだ！」
「獣だぁ？　ハッ、上等じゃねえか！　口だけの雑魚がよぉ、文句あんなら来いよ！」
「ちょ、ベートぉ、やめた方がええで～。ソイツに関わると面白、いやいやめんどい事なるからなぁ～」
「ロキ……面白がってる場合じゃない。やめろ、ベート。その男は……」
「うるせぇフィン！　俺の喧嘩だ、指図すんじゃねぇ！」
軟体生物と小さな金の獣を無視して灰色の獣は咆哮する。ああ、うんざりだ。
そこらじゅう汚物ばかり。せめて耳障りな音を止めねば、「虫」で溢れ返ってしまう。
【狩人】は揺蕩う思考のまま、灰色の獣に殴り飛ばされた。宙を飛び、無様に転げ回る。
全ては夢、全ては悪夢。青ざめた血は途絶え、幼年期は終わりを告げた。
気づけば立っているのは【狩人】で、転がっているのは灰色の獣だった。
「……ほうら、やっぱりそうじゃあないか。気色悪い「虫」が蠢いてるぜ……情けない糞袋野郎が……」
周りの獣の喧騒が絶える。押し固められた息遣いが狩りへの誘いを芳醇に醸す。
どれもこれも獲物ではない。歪んだ夜をひとしきり笑った【狩人】

は、灰色の獣に儀式を施す。
仰向けに倒れる獣の顔に、たっぷりと真珠ナメクジを塗りたくった。
途端、軟体生物が触手を吹き出し、腹を抱えて交信を始める。他の獣共は一様に灰色の獣から遠のいた。
さもあらん。精霊を獣は理解できない。アメンドーズ、アメンドーズ。憐れなる落とし子に慈悲を。
準備を整えた【狩人】は脳裏に《苗床》のカレル文字を刻む。ここからが本番だ、寄生虫を懐から取り出そうとし。
「店を汚すんじゃないよアホンダラアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ!!!」
獣血の主に殴り潰され、ビターンッ!! と床に陥没した。
「ギャアアアアアアアアアッ！ ああ、これが目覚め、すべて忘れてしまうのか……」
迫真の断末魔が響き渡る。いつもの言葉が勝手に口から漏れ出る。
そのまま【狩人】は、シュワアアアアと消えていき。ドウウウウウウウウンと世界が暗く陰る中、目覚めをやり直すのだった。

＜●＞　９９

「ねえ、あなた。私はコマドリ。ゆるゆると、私卵になるのかしら？」
「申し訳ありませんが、私ではお答えしかねます。神に聞いてみてはどうでしょうか？」
受付に寄りかかって尋ねてくる【狩人】に、エイナは鋼の笑顔で対応していた。
【狩人】はよくギルドに来る。特にダンジョンに潜った後は必ずと言っていいほどだ。
しかも血塗れで来る。粗暴な冒険者相手とはいえ、いやだからこそ清潔を第一とするギルド本部を【狩人】は容赦なく汚していく。

掃除は勿論ギルド職員の仕事だ。だからギルド職員は【狩人】が露骨に嫌いである。人の良いエイナでさえ冷たい鉄仮面を被る。
最初はそうではなかった。長年ギルドを悩ませる頭痛の種をエイナは解決しようとした。
しかし来るたびに仕事を増やし、大抵の場合奇行を繰り広げる。
この前のただ発狂して戦利品を投げつける程度ならかなりマシな部類だ。虫を出しては延々と踏み潰したり、得体の知れない汁を撒き散らしたり、「合言葉は？」と言ってギルドの入り口を塞がれるより全然マシだ。
ひどい時は何日も何日も柱に頭を打ち付けぶつぶつと呟いていた。柱は折れ、やたらめったら多い【狩人】の血がコンコンと汚し続けた。
冒険者に『処理』して貰わねば今もそうなっていたかもしれない。笑顔を貼り付けるエイナは【狩人】と事務的に向き合っている。
とても澄んだ瞳だった。軽装にトップハットの【狩人】は脂ぎった中年の髭だらけの顔から幼い少女の美声を吐き出している。
その瞳もまた無垢な色を宿していた。きっと悪気はないのだろう。【狩人】はただ純粋に疑問を問いかけているだけなのだろう。
「ピチャ、ピチャ、ピチャ……チュパ、チュパ、チュパ……」
そのまま肩に担ぐ得体の知れない骨の塊をしゃぶりだす【狩人】を見てエイナは思った。こいつは間違いなく狂人であると。
深く考えてはいけない。過去、【狩人】を理解しようとして日常生活を送れなくなった哀れなギルド職員がいる。「ちあきら」なるものに囚われた職員は異国の空の下、今も地底を掘り続けているのだろうか。
止めるべき思考だ。ただ受付嬢として無心に相手をすればいい。【狩人】はその内いなくなる。それをなぜか一番多く絡まれているエイナは経験則で知っていた。
「ねえ、あなた。海の音は不思議ね。嵐のようで、雨のようで、でもゆっくりと、滴るように、私の底から響いてくるの……私の底から、やってくるの……
でもゆっくりと、滴るようにね……」

「そうですか。それは良かったですね」
エイナは自動人形のように言葉を返し続けた。やがて飽きたのか、【狩人】は「ちょろり、ちょろり」と呟きながらふらふらと外へ出ていった。
無論、血塗れだったのでエイナの受付台とそこに至る通路は全て汚れ切っている。鉄仮面を保つエイナは、ドン引きしているミィシャに気づかないふりをして黙々と清掃にとりかかった。

ギルドを出た【狩人】は晴れ渡る空を見上げた。
全ての真実を見通す【狩人】の瞳も、ずっと夜にあるわけではない。日が昇れば蒙は啓き、見える一面も変わってくる。
獣の行き交う雑踏に紛れ、時折過ぎる軟体生物を記憶する。近しく遠く、決定的に違いながらそれらと【狩人】は似通っている。
いつしか疎通を為す日も来よう。彼らの腹を抱え転げ回る独特の交信が、【狩人】の耳に届く日が来るのなら。
紐を胸の辺りに通す軟体生物から得体の知れない何かを潰し潰し衣をつけて揚げた物を買った【狩人】は、唾液ではない粘液を分泌する舌先で脳喰らいのように摂取した。
「あ、あのぉ～……」
そうしていると、不意に獣の鳴き声が背骨を這い上がった。見れば、いつしかの白い獣が恐る恐る近づいてくる。
【狩人】はジュルルルルッと病巣のような物の内部を吸い取り、側だけになった衣を包み紙ごと咀嚼した。そしてさっきより三歩ほど遠い距離にいる白い獣を見つめる。
「あ、あの、貴方が『豊饒の女主人』で僕の代わりにお金を払ったと聞いて……その、も、申し訳ありませんでした！」
白い獣が腰を折る。頭を下げる行為は突進の前触れだろうか。しかし、この獣は狩りの対象ではない。無視しようとすると、白い獣は袋を差し出していた。中身はおそらく硬貨である。
【狩人】は思い出す。名状し難い臓物の山を差し出す獣血の主は、

【狩人】の硬貨を時に食い逃げの補填にすると。獣が対価を払うなど片腹痛いことだが、ここではそれが尋常だ。
だから、【狩人】は受け取らなかった。元より悪夢に住まう精神には不要なもの。少しばかり押し問答を繰り広げ、白い獣ははたと思い出したように鳴き声を上げる。
「あ、そうだ。今更なんですけど、僕はベル・クラネルと言います。その、貴方のお名前はなんて言うんですか？」
名前、名前。獣の咆哮を完璧に理解する【狩人】の耳は、それを聞いて少し止まった。
あっただろうか、なかっただろうか。【狩人】には名乗るべき多くの名前がある。そのどれを名乗るべきか。
聖剣の英雄か、最初の狩人か、狩人狩りの鴉か、時計塔の死者か、悪夢の主か、はたまた血の女王か。
どれでもいいし、どれもしっくりこない。少しばかり思考の瞳を働かせた【狩人】は、良い名前を思い出した。これならば、己を呼ぶに足る名であろうと。
白い獣に【狩人】は向き合う。そしてその名を口にした。
「９ｋｖ８ｘｉｙｉ」
「……え？」
「３ｅｕｋｅｎｐｋ……ｐ３ｕｍｙｚｔｕ……」
「あ、あの……？」
「８ｅｗｍ２ｘｘｘｎｋｄｙｅ４ｚｘｑｊｐｋｔｕｓｕｗ５ｓ２ｅｃｐ６７ｅｎｐｂｒｔａｃａｓｕ４ｄｑｍｓ３ｘｈｗ５８ｓｊｒｕｑ６ｂ９ｓ」
「ちょっ!?　や、やめ、頭が、頭がアッ――――!?」
その日以来、【ヘスティア・ファミリア】の廃教会に、【狩人】が現れるようになったという。

【狩人】
幼年期の終わり。頭上位者。９ｋｖ８ｘｉｙｉ。通称きゅーちゃん。あるいはきゅーけー。
終わらない悪夢を巡り続けて自己と他者の区別がつかなくなった発狂狩人。
記憶の中にある他者を自分と思い込み、その時々で言動・容姿がまるで異なる。
ひどい時はガスコインがアリアンナの服を着て人形のように振る舞う地獄が生まれる。
狩人アイは全てを見通す。世界は漁村とメンシスの悪夢をほおずきブレンドした発狂ワールド。人は獣、神は軟体生物。怪物はああ、窓に！　窓に！
狩人イヤーは全てを聞き取る。人の声は獣の咆哮でしかなく、全知無能の神の言葉は交信を用いなければ届かない。故に怪物の言葉も解している。
遠い昔オラリオに現れ、死んでは目覚めをやり直してきた。だからそういうものだと認識されている。
全ての遺志を継ぎ、超次元に至り、故に狂った狩人。赤子の上位者、人の獣。
その気になればオドンのようなこともできる。紐神の明日はどっちだ。
ベル・クラネル
白い獣。【狩人】に関わるべきではなかった。不憫な子。
やがて君も知るだろう。たとえ世界を違えようと、獣狩りの夜は、ずっと変わらない。
ヘスティア
胸に紐をつけた軟体生物。【狩人】についてよく知らない。紐神が

紐神たるゆえん。
エイナ・チュール
【狩人】がギルドに赴くと半分くらいの確率で絡まれる可哀想なハーフエルフ。鋼の表情筋。
ミィシャ・フロット
同僚を気にかけつつも【狩人】に関わりたくない筆頭。【狩人】のせいで仕事が増える。許すまじ。
「ちあきら」に囚われたギルド職員
地底を掘り続け恐るべき嗅覚で宝石を見つけ出す。しかし「ちあきら」ではなく、職員にとって価値はない。家族はそれを元手に生活し、職員の療養を続けている。
ベート・ローガ
売られた喧嘩を買ったらいつの間にか負けていた上に顔にナメクジを塗りたくられた人。
平たく言えば軟体ゴキブリを顔に塗りたくられたのでその後の評判はお察しである。
赦してくれ……赦して……くれ……ヒッ、ヒヒヒヒヒヒヒッ……
ロキ
神様専用【狩人】観察クラブの一柱。別にそういうクラブがあるわけではない。
腹を抱えて笑い転げる様が聖歌隊の交信と同一視されているとは夢にも思うまい。
シル・フローヴァ
【狩人】と絶対目を合わせない街娘。だって明らかに「見ちゃいけません」な人だもの。
アーニャ・フローメル
勢いで会話してたらそのうち慣れた。【狩人】と意思疎通できる数少ない人物。
ミア・グラント
獣血の主。

つまらないものは、それだけでよい武器ではあり得ない

路地裏を歩いていたリリルカ・アーデは横たわる【狩人】を見つけてしまった。

「ひっ……！」

思わず出かけた叫びを噛み殺せたのは僥倖だったろう。なにせ【狩人】は刺激するとロクなことにならない。

冒険者の新人歓迎、あるいは度胸試しに【狩人】が使われるのはそのせいだ。【狩人】という理不尽かつ困難な存在は、ある意味ダンジョンの恐ろしさと紙一重なのである。

ある新人は線の細い消え入りそうな女性の【狩人】と出会った。一目惚れした新人は【狩人】の許に通い、女性がいつの間にか椅子に固定され、頭が肥大し、最後には頭だけになる末路を見た。

以来その新人はどんな『迷宮の悪意』にも動じない精神を培ったという。その代わり決して女性と目を合わせなくなったそうだ。

彼にはもう全ての女性の顔が肥大化した頭部に見えてしまっていた。

あまりにも憐れだ。そんな目にリリは遭いたくない。だからすぐにでも立ち去ろうとし――リリの右手が掴まれた。

「えっ」

「――死体漁りとは、感心しないな」

「はっ!?」

何ヲ言ッテルンダコイツハ。硬直したリリはゆっくり手を放されても謎の圧力（ムービーシーン）で動けない。

立ち上がった【狩人】は、ぞっとするほど美しい長身の女になっていた。

「だが、分かるよ。秘密は甘いものだ」

言いながら、【狩人】はどこからか両刃の剣を取り出し。

「だからこそ、恐ろしい死が必要なのさ」

ガキイイイイインッ!!　と恐ろしすぎる音を響かせ。
「……愚かな好奇を、忘れるようなね」
怯える少女を見下ろしながら、そんなことをのたまった。
リリは全力で逃げ出した。
「なんで追っかけて来るんですかあああああああああああああああああああああっ?!」
憐れな小人族（パルウム）の悲鳴は、しばらく途絶えなかったという。

はっ、と【狩人】は目を覚ました。
目玉とフジツボに満ちた前衛建築、血塗れの路地に佇む【狩人】は手に持った《落葉》を見て首を傾げる。
はて、なぜ《落葉》を手にしているのか。今は時計塔の死者のつもりではない【狩人】は虚空に尋ねる。マリア様、どうして私が《落葉》を？　ねえ、マリア様？　マリア様？　ねえ、ねえ。
肉壁が喋るはずもなく、辺りは獣の声ばかり。変形した《落葉》をしまうためパキンッと変形前に戻した【狩人】は――とても不満気な顔でもう一度《落葉》を変形させる。
違う、この音ではない。自分（マリア様）の《落葉》はこんなショボい音を出さない。
血走った目をかっ開き《落葉》を凝視した【狩人】は、やがてガキイイイイインッ！　と変形機構をブチ鳴らし、満足そうにどこかへしまった。
なんてことはない。《落葉》は純技術武器だが、筋力で強引に変形させればいいのだ。つまり自分（マリア様）は脳筋なのだ。致命の火力も低いし。
秘匿はまた一つ破られた。見よ、青ざめた血の空だ。宇宙は空にある。
記憶に眠る無数の他人（じぶん）を繋ぎ合わせて【狩人】は歩く。見知らぬ道はいずれどこぞの古都なのだろうが、きっと寝ぼけていたのだろう。
感応する精神とはいえ、【狩人】は今も夢を見る。日の光は【狩人】に似合わない。だから昼間はよく眠る。だが眠りと悪夢は切っても

切れず、体が闘争を求めるのも致し方ない。
ふと目を覚ましたら臓物風呂で軟体生物たちにボコボコにされていたこともある【狩人】は、やがて来る夜の気配に口角を引き裂いた。
また、獣狩りの夜が来る。《獣狩りの斧》を手に、【狩人】は塔へ走り出した。

誰かの叫び声が洞窟に響いた。ダンジョン上層に潜る冒険者パーティの一つは顔を見合わせ、一応声の主を確かめる。
角を曲がってそこにいたのは、しかして血塗れの【狩人】だった。
右手を横に、左手を上に広げる【狩人】は膝をガクガクと上下させながら定期的に叫び声を上げていた。ときおり両手を伸ばす向きをスイッチし、スッと元に戻している。
見なきゃよかった。パーティはげんなりと肩を落とし、足早に去っていく。【狩人】は冒険者にとって縁起が悪い存在だった。悪い夢のようなものだ。今日は帰って風呂入って寝よう。
そんな冒険者パーティなど気に止めず、【狩人】は【交信】と【叫び】を繰り返す。今日こそは空に、宇宙に遺志が届くかもしれない。美しい娘よ、泣いているのだろうか。
地上と天界の神々が強烈な毒電波に頭を痛めているとも知らず、【狩人】はしばらく奇怪なジェスチャーを続け、やがて落胆した様子で【交信】を切った。
やはり遺志を返す者はいない。【狩人】は己以外の上位者をこの世界で見たことがない。己はずっと一人なのだろうか。
たまには上位者を狩りたいと寂しがりつつ、新たに湧き出た名状し難い怪物たちに【狩人】は仕掛け武器を振るう。
血肉が飛び、今日も怪物の断末魔が響く。やがて狩りが終わり、灰と死体が散らばる中、【狩人】は武器を振って血糊を飛ばした。
死闘の後、なお一人立つ。【狩人】ならば、やはりそうあるべきだろう。
「……」

しかし、だ。やはり物足りない。
《ノコギリ鉈》をガシャガシャと変形させながら【狩人】は不満を表す。
足りないのだ。おぞましい悲鳴が、身に降りかかる肉片の熱さが。何より血の甘やかさが足りない。
《ノコギリ鉈》では駄目だ。良くも悪くもスタンダードなこの武器では血の奥底より湧き上がる狩りの衝動が抑えきれない。
「つまらないものは、それだけでよい武器ではあり得ない」
かつて自分（パウダーケッグ）が嘯いた言葉を呟き、【狩人】は踵を返す。
武器が不満だ、ならばどうする？　決まっている、作ればいい。
いざ行かん、狩人の工房へ。【狩人】はおもむろに《メンシスの檻》を被ると、無限ダッシュを可能とするミコラ神拳交信走法を駆使して地上へ突っ走った。
「ギルド長!?　【狩人】が『怪物進呈（パス・パレード）』をしながら地上に向かっています!?」
「ええいまたかっ！　さっさと【ガネーシャ・ファミリア】を動員して対処に当たらせろ！　絶対にモンスターを地上に進出させるな!!」
それが地上で日常的大騒動を起こしているなど、笑いながら疾走する【狩人】の知ったことじゃなかった。

〈●〉　９９

「来たぞー！　てめえら、ありったけの武器を構えろ！」
「絶対に【狩人】を中に入れるな！」
「鍛冶師（スミス）とて矜持がある！　これ以上好き勝手されてたまるかっ！行くぞぉっ!!」
「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!!!」」
数分後。

炎のような紅い館の前には、ナメクジ入り上位者ミルクをぶっかけられた憐れな鍛冶師たちが転がっていた。
「……で、結局こうなったのね。だから止めなさいって言ったのに」
死屍累々に呻く光景に頭を痛めるのはヘファイストスだ。嘆息する隻眼の女神は、ギュインギュインガガガと気違いじみた金属音のする背後へ振り返る。
そこには何本もの触手を駆使して大量の火花を散らすブロッコリーの化身がいた。
「……」
否、否である。それは【狩人】だ。頭に理解してはいけない類の植物が生えた触手人間である。
いや、それも否だ。【狩人】は人間ではない。神々の子どもたちではない。そこは全ての神々の見識が一致するところだ。
ならば【狩人】とは何なのか。ある神は『招かれざる異界からの来訪者』と笑い、ある神は『悪意と冗談と宇宙的ホテップに手足が生えた魔物』と嘆き、ある神は『いあ！　いあ！　ちょぼらうにょぽみふたぐん！』と啓蒙（はっきょう）する。
ヘファイストスはすでに考えるのをやめた。彼女は【狩人】出現最初期に初手で己の工房に突撃され、あれよあれよと改造された挙句に今日まで利用されている。
神々の中でも善神かつ被害の大きいヘファイストスの心労は計り知れない。だから無となって【狩人】をやり過ごさねば胃痛で常時寝込んでしまう。
抵抗という抵抗はすでにやり尽くしており、なおも【狩人】に立ち向かう眷族たちには憐憫を向けつつも理解し無理に止めなかった。
自分の工房、自分の城をここまで残酷に台無しにされては、どんな鍛冶師でも自己崩壊を起こしてしまうだろう。時折飛んでくる粘液だけは俊敏に避けながら、ヘファイストスは書類仕事をすることにした。
「邪魔するぞー、主神殿。っと、【狩人】も来ておったか」
ヘファイストスが机に腰掛けたタイミングで現れたのは椿・コルブ

ランドだった。
【ヘファイストス・ファミリア】団長、Ｌｖ．５の第一級冒険者、【単眼の鍛冶師（キュクロプス）】。
『最上級鍛冶師（マスタースミス）』と称されるハーフドワーフの椿は、【狩人】に対してあまり敵愾心を抱いていない。
理由は一つ。彼女が弩（ド）が付くほどの鍛冶馬鹿だからである。
「今日は何を造っておるのだ？　おお、これはまたエラく複雑怪奇よな。どれ、手前にも一つイジらせてくれ」
冒涜的な動きで鍛造を進める【狩人】に近寄った椿は遠慮なしに並べられた部品を手に取る。
それをペシッと【狩人】ははたき落とし、手についた粘液を拭う椿にペイッと適当に《パイルハンマー》を投げ渡した。
それを興味深そうに解体して弄くり回す椿を視界の端に捉えながら、「今日は【火薬庫】の日なのね」とヘファイストスは無意識に思った。
【狩人】にとって椿やヘファイストスがどのような位置づけなのか定かではない。しかし元ヘファイストスの工房にいる間に限っては、どうやら同じ工房仲間と【狩人】は見ているらしかった。
だからか、【狩人】は鋳造過程を隠さないし技術は全て公開している。聞けばまともに答える確率も１％くらいはあるし、語らずとも互いの分野を模倣・昇華することで言葉なき鍛冶師の交流を営んでいた。
特にヘファイストスは長年の経験から一目でその時々の【狩人】の傾向が分かってしまうくらいだ。【火薬庫】の他にも【アーチボルド】【教会】【カインハースト】【古狩人】など、【狩人】の工房にはある種の派閥があるようだった。
まあ、それが何の役に立つかといえば、【狩人】に話が通じるか否かのちょっとした指標程度でしかないが。
そして今日は全く通じない日であるとヘファイストスは判断した。
「……むう、ここに仕込まれた小さな刃は全て『魔剣』か？　よくもまあこんな褒めて良いのか呆れて良いのか区別のつかんことをする。

これを仕込んだ意味はなんだ？」
「つまらないものは、それだけでよい武器ではあり得ない」
「おお、今日はそのパターンか。これでは話はできんなあ。手前で勘繰るしかないか。
うーむ、うーむ……ここがそれでこうなって……ああ、成程。やはりと言うべきか、火力の底上げに使っておるのだな。しかし『魔剣』など仕込まずとも元より馬鹿げた火力であろうに……」
「つまらないものは、それだけでよい武器ではあり得ない」
「ああ、ああ、分かっておるとも。意味の分からんほど精密な機構も、手入れの難儀さを度外視した湯水のような金と素材のかけ方も、汎用性なんぞ投げ捨てた使い手が武器に合わせろと言わんばかりの使いにくさも、すべてはそのためであろう？」
「つまらないものは、それだけでよい武器ではあり得ない」
「お主がそういうものだと理解してはやるが……手前には分からん！
全く分からん！
『至高』の前に『浪漫』を是とするなど、いまだ届き得ぬ手前には分かってやれん。その気になればいくらでも辿り着けるだろうに、そこだけは残念な奴よ。
……いや、訂正する。そこ以外もお主は残念だったな。特に頭が」
話が通じたのかはしらないが、急に触手プレイを強要してきた【狩人】に椿は長嘆した。肌や鍛冶に邪魔な胸にぬめる触手を剥がして「興が削がれた、風呂に入ってくる」と椿は退室する。
それを追わず、椿の置いた《パイルハンマー》を絡め取った【狩人】は、超小型『魔剣』や希少素材をつぎ込んだ小型炉を《パイルハンマー》に取り付け始めた。
ギャルリンギャルリンと鳴り響く音を背景に、ヘファイストスは「また市場が荒れるわ……」と遠い目をしながら書類を片付けるのだった。

【狩人】
寝ぼけてマリア様になる人。Ｑ：リリは逃げられましたか？　Ａ：頑張ってボス部屋から脱出しました。
きゅーちゃんとかきゅーけーとかは今のところベル君たちしか呼ばないのであまり出番はない。せっかくの聖杯文字が名前の【狩人】という希少価値が台無しである。
オラリオに来た当初、ヘファイストスの工房を見て「ほーん、ええやん」と奪い取った。ゴブニュのとこも同じように奪い取ってる。善神ほど被害を与えてしまうのは【狩人】の性なのか。
このあと完成した《ヒートパイル》は意気揚々と地下に潜った【狩人】の前にちょうど現れた『ゴライアス』君を一撃で壁のシミに変えた。『嘆きの大壁』とは『ゴライアス』の涙のことだろうか。
ちょっと強すぎない？　そう思われるだろうが、【狩人】は工房主なので血晶石を詰め込めるだけ詰め込む魔改造をしている。チートやチート！　地底人に謝れ！
リリルカ・アーデ
可哀想な小人族（パルゥム）。作者の書いてるもう一方でも可哀想な小人族（パルゥム）。
はやくベル君救ってあげてくれ。そしてそのままキャッキャウフフのラブロマンスであなたと私の二人っきりなウエディング☆ベルへ一直線ですよコノヤロー！（あざとい叫び）
そんなことボクが許すと思うなよバカヤロー！（紐神の叫び）
一目惚れした新人
初恋の【狩人】の頭が肥大化して発狂寸前に至るも当時は低啓蒙だったのでからくも逃れる。しかし「お願い、私を見捨てないで……私まだ、役に立てるのだから……」とＣＶ花澤〇菜で囁かれ最後まで突っ走ってしまった。

その後、彼は人格こそ保ったもののどんな時でも動じなくなってしまい、先輩や【ファミリア】上層部は大いに反省し、新人団員を【狩人】に接触させないようにした。
同期の女性はそんな彼を頼りにしつつも、目を合わせてくれないことに少しだけやきもきしてるとかなんとか。
本来の世界線では【超凡夫（ハイ・ノービス）】とか呼ばれてる。
ヘファイストス
憐れな女神。【狩人】に奪われた工房はどんな手段でも奪い返せなかったので別に新しい工房を新設した。
このことについて永遠に許す気はないが、【狩人】に構うだけ無駄なので放置している。
【狩人】は作った武器や【狩人】由来のアイテムを製法込みで大量に残している。それをヘファイストスは死蔵したかったが周囲の神々の圧力によって泣く泣く売りさばいている。
今回の《ヒートパイル》も【狩人】が量産して在庫を積み上げるのは目に見えているので今から胃が痛い。
椿・コルブランド
究極的に鍛冶の『至高』に辿り着くこと以外眼中にないので【狩人】を受け入れてしまえる人。主神への忠義や鍛冶師の矜持をぶっちぎるほどに【狩人】のもたらす技術、見識を貪欲に求めている。
【狩人】と一番話が通じるのは【アーチボルド】の時。意外に思われるかもしれないが、彼女は極めてビルゲンワース的な鍛冶師である。
ゴブニュ
【狩人】を絶対に許しはしない。そう、絶対にだ。来たら必ず【狩人】の頭を叩き割っている。
しかし【狩人】は動じない。むしろ頭をほじくっても瞳なんぞ見つからないのになぜ止めないんだろう、頭がおかしいのかな？　と筋違いの心配を【狩人】にされている。
それがゴブニュに知られる日こそ、【狩人】とゴブニュの終末戦争（ラグナロク）が勃発する日なのだ。

知ってるもの。夜の次は朝だって

「お帰りなさい、狩人様」
「ファッ!?」
ベルが探索から戻ると、廃教会の地下室前で幻想的と呼べるほどの美女が出迎えた。
２Ｍ（メトル）を超える長身、ごく手入れのされた質の良い服。
艶やかな灰色の髪と瞳、白く静謐な美貌がそこには宿っていた。
「あのっ、えっと、ど、どちら様でしょうか!?」
「私は人形。この夢で、あなたのお世話をするものです」
「お世話っ!?」
「狩人様。血の遺志を求めてください。私がそれを、普く遺志を、あなたの力といたしましょう。
獣を狩り……そして何よりも、あなたの意志のために。どうか私をお使いください」
「お使いくださいっ!?」
一体全体どういうことか分からないベルは初な表情を真っ赤にさせて混乱で目をグルグル回す。
「コラーっ！　ボクのベル君に手を出すんじゃなーいっ！」
そこに地下室から躍り出た一柱の女神がガシィッ！　とベルの頭に抱きついた。
「騙されちゃダメだベル君！　この子はきゅーけー君なんだ！　【狩人】君なんだぞ！」
「えっ!?　きゅーけーさん!?　いやでも、この方は女の人ですよね!?」
「きゅーけー君は自在に姿を変えられるんだ！　そもそも君が連れてきた時だって一秒ごとに容姿が変わる不定形存在だったじゃないか！」
「えっ!?　そ、そんなはず……あれ、でも確かにそうだったような……
きゅーけーさんは【狩人】さん、【狩人】さんは獣狩り、獣は呪い、呪いは軛……輪舞マラソン……ヌヌ、ゴシアナ……うう、頭が……」
「はっ、しまった!?　思い出しちゃ駄目だベルくーん!?」

「うう、神様、僕は一体……かっ、神様アッ!? 胸がっ、胸がっっ!?」
ヘスティアの豊満な胸に押し込まれたベルは思い出しかけたことが全部吹き飛んでしまった。それが良いことか悪いことか、脳に瞳を持った者だけが知るだろう。
「ああ、お寒いでしょう。狩人様……」
ワーワーと騒がしい彼らに、自分を人形だと思い込んでいる【狩人】は狩人様（ベル君）の世話をするために、ヘスティアを丁寧に引き剥がして少年をお姫様抱っこした。
そのまま真っ赤になってガチガチに硬直するベルに微笑みながら地下室に連れて行く人形を、ポカーンと見送ったヘスティアが怒号を上げて追いかけるのだった。

〈●〉 99

怪物祭（モンスターフィリア）と呼ばれる行事がオラリオにある。
ギルド主催、【ガネーシャ・ファミリア】主導のモンスターの公開調教（テイム）である。
パンとサーカスなどと揶揄されるものの、普段見られないモンスターの恐ろしさ、それに立ち向かう冒険者の勇ましさを一度は目にしようと、怪物祭に合わせ都市内外から多くの観客が集まっていた。
舞台は円形闘技場（アンフィテアトルム）、座席という座席が多くの亜人（デミ・ヒューマン）で埋まった舞台の中央に、奴はいた。
そう、頭からカリフラワーを生やし、啓蒙高き軟体踊りで体を高速振動させる【狩人】である。
「俺がガネーシャだ！　そう、俺が【群衆と獣の主（ガネーシャのフレンズ）】だあああああああああっ!!!」
なぜ【狩人】がここにいるのか。それは暑苦しい男神の声からお察しの通りだ。
ガネーシャは【狩人】と意思疎通が可能な稀有な神の一柱だった。

互いに雄叫びを上げ存在を誇示し合う神と上位者は、その精神が夜空の星灯りの漿液湖に至り、共鳴する波長の軸芯融和を果たしたのである。

よってガネーシャは【狩人】の言葉を知り、【狩人】は交信によってガネーシャの精神を汚染した。意気投合した一柱と宇宙的悪夢はその場のノリで協力が可能になったのであった。

モンスターでも人間でもない冒涜存在である【狩人】を怪物祭（モンスターフィリア）に引きずり出す。それはガネーシャとギルドの主神の神意に沿う効果をもたらすだろう。

絶対に外さない仮面に大量の目玉を取り付けようとしたが眷族に号泣されて止められたガネーシャは、大変不満ながら【ファミリア】の本拠『アイアム・ガネーシャ』の右腕を四本、左腕を三本に増やすだけで我慢していた。

『おおっとぉ！【狩人】、ここで『吐き気を催す例の光』を放ちました！ 精神を病まれた方は至急事前配布されたお薬をお飲みください！ モンスターすら自我崩壊を引き起こす光ですのでどうぞご注意を！』

実況は『喋る神秘魔法』を自称する【冒涜聖杯３０００階層踏破者（エーブリエタースを継ぐ者）】ことイブリ・アチャーだ。肥大した頭部を被り【狩人】由来のサングラスを頭頂にちょこんと乗せるおちゃめな彼は、色々な粘液をだらだらと首筋に垂らしながら抑揚が裏返った金切り声で実況する。

イブリの声以外シンと静まった舞台で【狩人】は体に巻きつけた触手を解いた。そして目の前で精神崩壊を起こし顔の穴という穴から液体を垂れ流す『シルバーバック』に近づき、秘儀【幸せな開放】を発動させる。

相手の耳に触手を滑り込ませクチュクチュすることで相手を極度の幸福状態にし従わせる秘儀だ。水銀弾を触媒に発動するこの秘儀は、シルバーバックに脳に瞳を得たかのような晴れやかな幸福を与え、死ぬまで絶頂に導き続ける文字通り『幸せな開放』をもたらすのである。

こうして調教（テイム）を完了した【狩人】はシルバーバックに乗り、冒涜的

な踊りをしながら会場を後にする。
観客は上々の反応で、頭を押さえ呻く者七割、現実を受け入れられない者二割、延々と笑いながら空に手を伸ばす者一割だった。
今年の怪物祭（モンスターフィーリア）も、例年の如く大成功のようであった。

狩人、狩人、狩人。直近の【狩人】は自分の存在に疑問を抱いていた。
自分は何の狩人だったか。【教会】か？　【貴族】か？　はたまた【異邦】か？
【狩人】にとって物忘れは珍しいことではないが、それを放置するのは嫌に気分が悪い。
自己を明確に定めるため、肌から無数の白いミミズが生えている大猿の怪物に乗りながら【狩人】は思考する。
そうしていると、辺りから獣の悲鳴が聞こえ始めた。ギョロギョロと瞳を回転させれば、名状し難い怪物たちが獣共らを追いかけている。
その中にふと、小さくか弱い、少女のような獣を見つけ。
【狩人】は己が何の狩人であったか、ようやく思い出すのだった。

アイズ・ヴァレンシュタインはオラリオを駆ける。
円形闘技場（アンフィテアトルム）から逃亡したモンスターを駆逐するためだ。
風を纏い、飛翔するように屋根を走り抜け、人に襲いかかる怪物を一刀で斬り捨てる。
（数が多い……どうしてこんなに？）
すでに数十の怪物を斬り払ったアイズは住人を逃がしながら困惑する。
【ガネーシャ・ファミリア】はこんなにモンスターを捕まえていたのか？　調教（テイム）するにしても多すぎる数に思わず眉間に力が篭もる。
幸い犠牲者は出ていないが、これでは時間の問題だ。急いで事態を

収束しなくては、と麗しき金の【剣姫】は【エアリエル】の出力を上げる。
そして怪物を探し、屠る最中、たった一人で歩く少女の姿を見つけた。
「！」
避難誘導をするためアイズは側に着地する。魔法の風が吹き荒れるものの、少女はなんら気に留めた様子がなかった。
「大丈夫？」
「エッエッエッエッ……」
「ここは危険。早く逃げて」
「お父さん、お母さん、帰ってきてよう……寂しくって……怖いよう……いやだよう……グスッ」
「……はぐれたの？」
「一人はいやだよう……エッエッエッエッ……」
「……」
アイズが話しかけても反応せず、少女はトボトボと歩いて行く。その姿に幼き日の記憶を刺激されるアイズは途方に暮れるが、少女の行く先に怪物の姿を捉え、キッと表情を鋭くする。
（……怪物を倒して、この子を安全な所に届ける。まずはそうするべき……！）
疑問を置いてアイズが走り出そうとした、次の瞬間。
怪物の懐に、いつの間にか少女の姿があって。
醜悪な外皮を貫いていた小さな手が振り抜かれた直後、モンスターは大量の血を吹き出して絶命した。
「――え？」
少女は血の雨に打たれていた。
両目を腕で覆い、泣き続ける少女。血と肉がこびりつく右手には、何かがひらひらと揺れている。
呆けるアイズの目の前で、少女に更なる怪物の影が迫る。
「エッエッエッエッ……」
顔も上げず、泣き暮れる少女は。

怪物の爪を紙一重で躱し、無防備な鳩尾へ腕を突き刺し、千切り抜く。
響く怪物の断末魔。立ち止まったまま鮮血を浴びる少女。
続々と現れるモンスターたちに、少女は泣きながら歩み寄り――虐殺が始まる。
「アイズ！　加勢に来たわよ、って……」
「どうしたのティオネ、早くアイズを手伝わないと……なに、あれ……」
立ち尽くす【剣姫】に駆け寄るアマゾネスの姉妹は、その光景に同じように動きを止めた。
モンスターに囲まれ、けれど傷一つ負わぬ少女。
紙一重で攻撃を躱し、【加速】し、怪物の臓物を抜き千切る姿。
泣きながら一切の容赦なく異形を屠る右手に巻かれた、血塗れの赤リボン。
それは冒険者たちの間で有名な、だが決して地上に現れぬはずの、ダンジョンにのみ見える異質。
「アイズたーん、どないしたんやー？　って、な、なんやアレは⁉」
マイペースにやって来て仰天するロキに、アイズはポツリと呟いた。
「――オーゼイユ」
「は？」
「血涙（ちなみだ）の、オーゼイユ」
「ア、アイズたん？　なに言うとるん？」
「泣いている少女の形をした――【狩人】」
「はあっ⁉　アレが【狩人】やとぉ⁉」
目を剥く道化の女神を他所に、アイズは見続けていた。
怪物を殺し、殺し、殺し、ただ殺す、赤リボンを巻いた少女を。
やがて殺し尽くし、死闘の後なお一人立つ――血塗れの【狩人】、〝血涙のオーゼイユ〟を。
「エッエッエッ……」
顔を伏せ、左腕で覆いながら少女は歩き出した。

アイズたちの方へ。硬直し息を潜める彼女たちの前に立ち――少女は血の雨を浴びた顔をアイズに見せ、静かに問いかける。
「……あなた、だあれ？　知らない人、でも、なんだか懐かしい臭いもするの。
もしかして、獣狩りの人かな？」
「……」
「だったら、お願い、お母さんを探してほしいの。獣狩りの夜だから、お父さんを探すんだって……それからずっと帰ってこない。
私ずっと……でも、寂しくって……」
「……」
「な、なあアイズたん、なんで黙ってるんや？　少しくらい話たっても……」
「ロキは黙ってて!!」
「なんでや!?」
恐る恐る声をかけるロキにティオナとティオネが凄まじい剣幕で怒鳴りつける。ロキはビビッて縮こまり、アイズは強い緊張を滲ませる表情で、毅然と言い放った。
「駄目。私たちはあなたに協力できない。決して――たった一度でも」
「……わかり、ました。ごめんなさい、獣狩りさん、お話ししてくれてありがとう。
お仕事、がんばってね」
「……」
「エッエッエッエッ……エッエッエッエッ……」
顔を伏せ、涙を流しながら少女は去っていく。それを固い表情で見送って、アイズ達三人はふーっと一様に息を吐いた。
「どういうことなんや……ただの子供にしか見えんかったけどなあ」
「あのねえ、ロキ。いくら無害そうに見えても【狩人】なのよ？　関わっちゃいけないに決まってるじゃない」
一人訳の分からないロキはボヤくように言い、ティオネが苛立ち混じりに説明する。

「冒険者はアレを〝血涙のオーゼイユ〟って呼ぶわ。ダンジョンにしか現れないはずの、女の子の振りをした【狩人】。何を頼まれても絶対に答えちゃいけないヤツよ」
「あー、聞いたことあるようなないような……でもなんでや？　答えるくらいええやんか、泣いとる子放置するとか胸糞悪いで」
「……ロキもあれを見れば、そんなこと言えなくなるわ。応えて、知って、もしついていこうものなら……思い出したくもないわ……あんな、おぞましい……」
知らず冷や汗を流すティオネの強い警戒心にロキは黙りこくる。
同じように警戒を解かないティオナと、アイズの瞳の中で。少女は延々と泣きながら、とぼとぼと歩いていった。
こんなにも晴れ渡った空の下で。暗いトンネルの奥へ、消えていくように歩く少女を。

【狩人】
不定形で確かな姿を持たない【狩人】には、だがその有名と不吉さから別の名を与えられた姿がある。
〝血涙のオーゼイユ〟もその一つだ。
血塗れの赤リボンを右手に巻いた、俯いて泣き続ける少女。
冒険者たちは彼女をおして、三つの禁句を共有している。
応えるなかれ。関わるなかれ。共に歩むなかれ。
それを破った冒険者は、迷宮の届かざる領域に辿り着くという。そして奥底の、人に到底理解し得ぬ神秘に出会った者は――
〝血涙のオーゼイユ〟。

血の涙を流すのでなく、血を涙で洗う少女。最も幼く、無慈悲で、危険な【狩人】。

という建前のヤーナムの少女を摸倣した【狩人】の姿。

あいにくと【狩人】は豚を一撃の元にリボンエンチャで沈めた少女の行く末を知らないので、狩りの最中に覚えている記憶を自分だと信じている。

不穏なのは全部【狩人】のせい。明らかに善良な少女なのにそれが自分だと思い込む【狩人】は少女と【狩人】脳で合体事故を起こし、最終鬼畜ヤーナム少女が爆誕した。

なおヤーナムの少女の名前は作者の知る限り公開されてないので適当につけました。ググればすぐ分かるんじゃないかなニャルラトホテプ。

ガネーシャのフレンズ

【狩人】と交信を果たしてしまった不運な男神。本人は全く不運だと思っていないしむしろ新たなるガネーシャ、【ネオ・ガネーシャ】の一形態が開かれたのでとにかく良しとしている。

怪物祭（モンスターフェイリア）における怪物大脱走の責任を負わされて『アイアム・ガネーシャ』の七本腕を二本腕になるまでへし折られる罰を受けた。本人は絶対に嫌だと泣き喚き許しを乞うたが決して許されることはなかった。

なお、脱走したモンスターの大半は【狩人】が円形闘技場（アンフィテアトルム）周辺に勝手に持ち込んで隠したモンスターであると後日判明するが、やはりガネーシャが許されることはなかった。

アメンドーズみたいなガネーシャ像気持ち悪いんだよ。それがガネーシャ以外の神の総意なのだ。

イブリ・アチャー

聖体を拝領し地底人となった男。過酷な聖杯探索を啓蒙の果てに得た神秘魔法によって走り抜け、ついにエブたそに見えた幸運な眷族。

その鍛え抜かれた肉体と全身に装備した神秘血晶によってＬｖ．６に到達した【ガネーシャ・ファミリア】最強の冒険者。

なお神秘血晶とエブたそから貰った肥大した頭部（あとサングラス）以外何も着ていないので、どこに出しても恥ずかしくない変態である。

変態と罵られると喜んで神秘魔法（意味深）を撒き散らすので刺激しないように（ｂｙシャクティ・バルマ３８歳独身）

【幸せな開放】

本作の【狩人】の台詞はネットに転がってるブラボ解析情報からコピペしてるんですけど、なんか没っぽい秘儀一覧の中にあった。

他にもとても興味が引かれる秘儀の名前がかかれていた。その名も聖液受領。

聖　液　受　領

聖　液　受　領

やっぱフロム・ソフトウェアってド変態の集まりだわ

異端の鍛冶師は狩人の夢を見るか

【ヘファイストス・ファミリア】には〝火薬庫（パウダー・ケッグ）〟と呼ばれる男がいる。オラリオ全土、いや『古代』より続く鍛冶師の系譜の中で、異端と称される工房主だ。

【ヘファイストス・ファミリア】本拠（ホーム）から遠く離れた、うらぶれた教会の側に工房を構える〝火薬庫〟は、複雑怪奇な機構を持つ奇妙な武器を造り出すという。

それはこれまで武器とされてきた刀剣類の形状から大きく外れ、いっそ何らかの工具と言った方が近しいものも多い。事実、〝火薬庫〟がまだそう呼ばれる事のなかった無名の時代、それを武器として扱う者は同じ鍛冶師の中にすらいなかった。

だが世の中には酔狂な輩がいるもので、面白半分に〝火薬庫〟の武器を買ってダンジョンに潜る冒険者がいた。その武器を見た誰しもが疑問を抱き、ああダンジョンの恐ろしさを知らぬ愚か者かと嘲笑ったものだ。

だが――実際にその武器が振るわれる姿を見た者は、決して〝火薬庫〟の武器を侮らない。それがどれ程恐ろしい性能を有しているのか、身に染みて理解しているからである。

一撃必殺、二の太刀要らず。ただ一発の渾身にのみ特化した〝火薬庫〟の武器は、その複雑な機構から繰り出される爆発的な火力で数多くのモンスターを屠ってきた。

上層、下層、深層を問わず。時には階層主、『迷宮の孤王（モンスター・レックス）』でさえも一撃の元に粉砕してのけた〝火薬庫〟の武器は、性能が広まるにつれ窮地を切り抜ける逆転の武器として多くの冒険者に求められることになる。

……だが、〝火薬庫〟はその奇妙な名声とは裏腹に、武器のほとんどを市場に流さなかった。売る事を拒絶するあまり一時期はオラリオから姿を消した〝火薬庫〟を、頭痛の種とする主神（ヘファイストス）はこう評している。

〝火薬庫〟の武器は正統にあらず。それはただ獣を狩るための、祈

りにも似た異装なのだ、と。

「それじゃあ、神様！　行ってきます！」
廃教会の古びた柱に少年の声が浅く染みこむ。ベル・クラネルは地下室の扉を閉め、崩れた門を通り過ぎた。
「おはようございます！」
そして隣人に日課の挨拶をする。廃教会の隣、まるで焼け跡のような工房で槌を振るう鍛冶師に向けて。
奇妙な男だった。鉱石を熱する炉に近しいにも関わらず、厚手のコートを纏っている。全身は暗い色で満たされ、枯れた羽根が特徴的な帽子を目深に被っており、その上で黒い布を顔中に巻いているのでどんな人物か分からない。
男はベルの声に槌を高く掲げて反応を示し、そのまま鍛冶に戻る。ベルは笑顔で大きく手を振って、ダンジョンへと向かった。

「おお、やっとるのう、〝火薬庫（パウダー・ケッグ）〟」
昼下がり、焼け跡のような〝火薬庫〟の工房を訪れたのは【ヘファイストス・ファミリア】団長、椿（ツバキ）・コルブランドだった。
急な来訪者に、しかし〝火薬庫〟と呼ばれた男は何の素振りも見せず、黙々と精製金属（インゴット）に槌を振り下ろす。無反応を貫く男に椿（ツバキ）は肩をすくめ、ずかずかと工房内に足を踏み入れた。
「またお主は妙な物を造っておるな。歯車、螺子、バネに引き金、管に鎖に……これは魔剣か？　よくもまあこんな指の長さほどもない魔剣を造るものだな。質（たち）の悪い冗談としか思えん」
焼け残った机に並べられた部品の数々を手に取っては見比べる椿（ツバキ）に、〝火薬庫〟はやはり反応しない。工房主が黙っているのを良い事に、椿（ツバキ）はしばらく工房内を漁り回った。
「おお、そうだ〝火薬庫〟。近い内に遠征に行くぞ」
〝火薬庫〟の鍛造が佳境に入っている最中、ふと思い出したように

椿(ツバキ)は言った。槌を振り上げた〝火薬庫〟は、その姿勢のままピタリと止まる。
「【ロキ・ファミリア】からの依頼でな、遠征に上級鍛冶師(ハイ・スミス)を幾人か貸してほしいそうだ。無論、手前も含まれておるぞ。
報酬は『深層』のドロップアイテム。市場にも滅多に流れない垂涎物の素材よ。『至高』を目指す鍛冶師ならば、当然手に入れたいと思うだろうなぁ」
「……」
沈黙を保っていた〝火薬庫〟は、振り上げたままだった槌を振り下ろし、カァンと一際大きな金属音を立てる。そのまま鍛造を再開する黒ずくめの男に、椿(ツバキ)はやれやれと首を振った。
「興味なしか。お主は相変わらず〝異端〟の道を進むのだな。まあ、好きにしろとしか手前には言えんが。
だが、遠征には共に来て貰うぞ。【ロキ・ファミリア(あちらさん)】からの要請だ。『〝火薬庫〟と呼ばれるその所以、存分に発揮して貰いたい』と、フィンの奴が言っておったぞ」
「……」
「む、何だ？　指なんぞ指しおって」
小人族(パルゥム)の勇者の声真似をする椿(ツバキ)に構わず、〝火薬庫〟は槌を置いて指を差す。指先にいた椿(ツバキ)は右へ左へ視線を投げ、背後にある大きな木箱に気がついた。
「ああ、これか。どれどれ……成程のう、ま～た摩訶不思議な武器(もの)を造りおったな。
よし！　こいつは手前が持っていってやろう！　どうせ【ロキ・ファミリア】に渡すのだろう？　ならば手前が先に見ても何の問題もあるまい！
……なんじゃその目は。安心せい、責任を持って届けてやるわ」
ジトーッと視線を向ける〝火薬庫〟に手を振って、棺桶ほどの大きさの木箱を椿(ツバキ)は肩に担いだ。〝火薬庫〟は再び槌を取り、鍛造作業に戻る。
「……なあ、〝火薬庫〟。お主はまだ、あれを求めておるのか？」

そんな、鉄と向き合う男の背に、椿（ツバキ）は静かに呟いた。囁きに近い言葉は確かに〝火薬庫〟に届いた筈だが、男は槌を振るい続けるだけだった。

その姿に、隻眼の女鍛冶は炎のような緋色の眼を閉じ。焼け果てた工房の外へ足を踏み出した。

「――やはりお主は、〝異端者〟よ。誰のためでもなく、ただ己のために武器を打つ。本当はそうではない癖に、いたずらに鍛冶を啄（ついば）みおって――まるで『鴉』よな」

「……」

「戯言だ、忘れてくれ。邪魔したな」

言い捨てて、今度こそ椿（ツバキ）は工房を後にする。残された〝火薬庫〟は、何の感慨も受けた様子を見せず、ただ槌を振るい続けるのだった。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!?』

それが、『ゴライアス』の上げた最後の咆哮だった。

引き絞られた腕、高速で駆動し歯車を掻き鳴らす機構。常識を遥かに超える巨大な『杭』が、『ゴライアス』の胸部に狙いを定める。

そして、瞬間――大爆突。複雑怪奇な機構に散りばめられた極小の魔剣が反応し、連鎖起動した機構を巡る莫大なエネルギーが全て『杭』に集中する。

『不壊属性（デュランダル）』を付与された最高精製金属（オリハルコン）製の『杭』は、違わず『ゴライアス』の胸を刺し穿った。否――突き穿ち、内側から爆散させた。

『ゴライアス』。ダンジョン中層の『階層主』。他のモンスターと一線を画す『迷宮の孤王（モンスターレックス）』たる巨人のモンスター。

その巨人が、上半身を失っていた。ドスンドスンと重い音を立てて落ちた両腕が、崩れ落ちた下半身が間を置かず灰と化していく。

――やがて灰の山となった『ゴライアス』の残骸の上に、その男は立っていた。黒ずくめの外套を靡（なび）かせ、殺人的な目つきで前方を睨む〝火薬庫〟。その右手に装着された、大の大人ほどもある巨大機構――

―《パイルハンマー》から、砕け散った魔剣と薬莢が排出される。
「すげぇ……」
「『ゴライアス』が、一撃……!?」
「信じられない……」
「噂には聞いていた〝火薬庫〟の武器……こんなにすごいなんて……!?」
「あれが、〝火薬庫〟っすか……」
　口々に声を上げる【ロキ・ファミリア】を背に、〝火薬庫〟は腰にくくりつけた金属の塊を手にし、《パイルハンマー》に装填する。ガギンッ!!　と重厚な金属音が、戦いの終焉を告げる鐘のように鳴り響いた。
「……」
　ザッザッと灰を踏み締めて隊列に戻る〝火薬庫〟。道筋にいる【ロキ・ファミリア】の面々は慌てて道を開ける。
　その先には諦め切った顔で苦笑する【ヘファイストス・ファミリア】の上級鍛冶師（ハイ・スミス）の面々と、ぶるぶると俯いて震える椿（ツバキ）の姿があり。
「こっ、このお――馬鹿者（ばかもん）がああああああああああああっ!?」
　爆発した椿（ツバキ）の手が、スパーンッ!!　と〝火薬庫〟の頭を叩いた。
「何を勝手な事をやっておるんじゃお主は!?　『ゴライアス』は【経験値（エクセリア）】を積ませるために平団員に任せるとフィンの奴が散々言っておっただろうが！　それを接敵と同時に飛び出して仕留めてしまいおって!?　どう話をつけるつもりだお主は!!」
「――」
「何？　手前が本来持ってくるつもりだった武器を勝手に持っていくのが悪い？　おかげで新しく作った武器（パイルハンマー）の試し撃ちをしなければならなくなった、じゃと!?
　かーっ!!　この期（ご）に及んで手前に責任転嫁するか！　なんて奴だこのすっとこどっこい！　〝異端者〟！　凝り性！　武器とも呼べん馬鹿武器造りめ!!」
「……あー、椿（ツバキ）？　そろそろいいかな？」
　スパーンスパーンといい音を立てて〝火薬庫〟を叩き続ける椿（ツバキ）に、

フィンが声を掛けた。それに気付いた椿（ツバキ）は〝火薬庫〟の頭を地面に叩きつけ、ついでに自分の頭も地面につける。
極東の最上級の謝罪表現――土下座である。
「すまんフィン！　この馬鹿にはよぉーく言って聞かせる故、此度の失態は見逃してくれ！　なんならこやつの分の遠征報酬はなしで良い！　くれてやったこやつの武器の支払いもゼロで良い！　だから手前らに責任をおっかぶせるのは勘弁してくれ!!」
「いや、そこまで譲歩しなくてもいいよ、椿（ツバキ）。何となくそんな気はしていたからね」
「ただ、次は無しにして欲しいかな？」と【ヘファイストス・ファミリア】団長として謝っているようで責任を全力回避する椿（ツバキ）に、フィンは苦笑いを浮かべて釘を差した。それに感謝する椿（ツバキ）の隣で、頭が地面に埋まった〝火薬庫〟は沈黙したままだった。

「ああ？　〝火薬庫〟だぁ？　あんなイカレ野郎がどーしたっての。フザケた武器を造りやがる、そんだけの鍛冶師だろーが。
……〝火薬庫〟が強（つえ）え、だと？　ハッ、それが何になる？　あのイカレ野郎はそんな事（こと）ぁ眼中にねえ。なんならお得意の鍛冶だってどうでもいいんだろーぜ。あの眼を見ただろ？　獣を見る狩人の眼だ。俺だろうが誰だろうが同じ眼で見やがって……クソが！　胸糞悪（わり）い野郎だぜ！」
怒りを吠え、ベートは吐き捨てた。灰毛を逆立てる狼人（ウェアウルフ）の男は、止まぬ怒りに燃えていた。
「えっ、〝火薬庫〟？　うーんと、すっごい武器使ってるよね！　ガガガ、ゴゴゴ、ドッカーン!!　って感じでさ！　私の大双刃（ウルガ）よりおっきいのもあるし、すっごい派手だし！　時々いいなーって思うもん。今度何か注文してみよっかな？
性格？　話した事ないから分かんないや！」
ティオナは快活に笑ってそう言った。大双刃（ウルガ）を握るアマゾネスの少女は、〝火薬庫〟より道中で目撃したある『冒険』に夢中であるよ

うだった。
「〝火薬庫〟？　さあ、私は噂以上の事は何も知らないわね。〝火薬庫〟って、そもそもあまり表に出てこないし。……そういえば風の噂で聞いたんだけど、あいつって団長よりも古株だそうよ？　かなり昔からオラリオにいたらしいわ。だからどうした、って話だけど」
　ティオネはあまり興味がなさそうだった。とある部分が妹と大層違うアマゾネスの女傑は、フィンに呼ばれると目をハートにして物凄いスピードで走り去っていった。
「〝火薬庫〟のう。実は儂はあやつの武器を一度買った事があるんじゃが、散々じゃったぞ？　デカいわ嵩張るわ、扱い辛いわ、機構が複雑過ぎて手入れが欠かせんわで大変じゃったわい。ま、それを帳消しにするぐらいの火力はあるんじゃがのう。あの時は儂もまだ青かったもんじゃから、使った瞬間腕がへし折れたわい。片腕だけで済まなかったらどうなっておった事やら……」
　ガレスは懐かしそうに話した。目を細めて髭をさするドワーフの大戦士は、そのまま長い昔話を始めたのでそそくさと後にした。
「〝火薬庫〟、か。あの男は、一言で言えば『謎』だ。誰も出身を知らない上、いつ頃からオラリオにいたかも分からない。分かっているのは人間（ヒューマン）である事と、扱う武器の凄まじさか。私も含め、あの覆面の下の顔すらほとんどの者は知らんだろう。
　……まさかとは思うが、憧れているのか？　やめておけ、あの男のようになるのは私が許さんぞ」
　リヴェリアはスッと目を細めてこちらを見つめてきた。ハイエルフの王女は、どうやら話を聞き回っているのを耳にしているらしい、話が長くなる前に逃げ出した。
「ンー、〝火薬庫〟ね。彼がどういう人間なのかは、正直僕も測りかねているかな。一つ言えるのは、彼は僕らとは違う場所を見ている。そこを目指しているかどうかは知らないけれど、それを僕らが理解する必要はないし、する意味もないだろう。
　彼は武器を打ち、僕らは武器を買う。言ってしまえば、それだけの関係なんだ。今回の遠征に同行しているのも椿（ツバキ）の功績が大きい。

だから、注意しておくよ。あまり彼に近付くべきじゃない。〝火薬庫〟は冒険者でもなければ――きっと鍛冶師でもないからね」
フィンは真剣味を帯びた眼差しで諭すように言った。小人族（パルゥム）の勇者は、その聡明さで〝火薬庫〟という男を朧気に掴んでいるようだった。
カァン、カァンと音が響く。安全階層（セーフティポイント）に設けられた野営地の一角で、〝火薬庫〟は鍛冶をし続けている。
天幕も張らず、野晒しのままでひたすら槌を振る男の背後に、人間（ヒューマン）の少女――アイズは姿を現した。
「……」
「……」
双方、言葉はない。元より口下手のアイズと、話すという行為をほとんどしない〝火薬庫〟。どちらとも口火を切らない状況で、槌の旋律だけが吹き抜けていく。
「……あの」
「……」
しばらく経って、ようやくアイズが口を開いた。しかし〝火薬庫〟は反応しない。鉄を打ち続ける背に、アイズはもう一度声を出す。
「あの……」
「……」
「……――どうして貴方は、そんなに強いんですか？」
戻らない反応にしびれを切らして、アイズはついに思っている事を言葉にした。途端、ピタリと〝火薬庫〟の腕が止まり、槌の旋律が途切れる。
静まり返った空間。風の音だけが通り抜ける中、不意に〝火薬庫〟は動いた。
「――」
「!?」
首だけを捻じ曲げる黒ずくめの男。顔を覆う覆面の奥から、鋭いという言葉を飛び越した眼光がアイズに突き刺さる。
それでアイズは、悟ってしまった。蕩けて歪んだ〝火薬庫〟の瞳

孔。そこにあるのは人やそれに準ずる思考ではない。
〝火薬庫〟の見ているものは、自分とは決定的に違う。それを知ったアイズは俯き、その場を後にする。
それでも少女は、知りたかった。
〝火薬庫〟と呼ばれる男の、その強さを。

冒険者達が倒れている。
地に伏し、顔を擡げる事しか出来ない彼らの睨む先には、周囲に散った魔力を吸収する『穢れた精霊』の姿がある。
モンスターにあらざる力、長文詠唱による精霊由来の魔法を放たれれば、今度こそ全滅するだろう。その諦念が、絶望が、冒険者たちに降りかかる。
その時。立ち上がり、希望を示したのはフィンだった。勇気を鼓舞し、立ち向かう意志の力を燃え上がらせたのは、小人族の勇者だった。
狼人の男が立ち上がり、アマゾネスの姉妹が武器を構え、エルフの少女が、【剣姫】が意志を取り戻す。彼らが精霊に挑む傍ら、生意気な小人族に挑発されたドワーフの戦士が、ハイエルフの王女が不屈を示す。
「……いいものを見た。手前も一助となろう」
椿もまた、右眼を細め、武器を取って立ち上がった。Ｌｖ．５の最上級鍛冶師、【単眼の巨師】は、ふと己の背後に目をやり、笑う。
「お主の顔を見るのも久々だな。相変わらず不景気な面をしておる」
緋色の視線の先で、〝火薬庫〟が立ち上がっていた。フィンに鼓舞されるまでもなく、己の意志を再燃させた黒ずくめの男は、始まりから背負っていた剣に手を掛ける。
剣が引き抜かれ、鞘代わりの包帯が解けていく。現れしは、刀身に緻密な刻印の施された大剣。逆立つ灰色の髪の男はそれを天に掲げ――空中に何処からともなく現れた『光の小人』が踊り、青い月の光が刀身に集まっていく。
それは〝火薬庫〟がかつて眼にし、ついに得られなかった『導き』。

鮮明に刻まれた記憶を追い、ひたすらに求め続けた最新の『模倣』。
ただそう見えるだけの錯覚である『光の小人』が大剣に集い、暗い光波が刃を成す。それは何処か宇宙の深淵に似た暗闇の陥穽(かんせい)を宿しながら、純粋にそれを求め続ける人の輝きがあった。
「ようやく抜いたか。全くうつけめ、お主は何時も傷つかねば正気に還らん。ほとほと面倒な奴よ。だが抜いたからには、あれを狩るつもりなのだろう？
――狩りはお主の本領、あのような獣にも劣る存在なぞ、それこそお主の領分だろうて。
なあ、〝火薬庫〟。いや――
――――【聖剣】のルドウイークよ」
椿(ツバキ)が笑う先で、ルドウイークと呼ばれた男は剣を両手で持ち、眼前に構える。
青い月光に照らされる左眼が、遠く微笑む『穢れた精霊』を睨んでいた。

〝火薬庫〟、あるいは【聖剣】のルドウイーク
オラリオに現存する二人のＬｖ.(レベル)７の一人。黒竜討伐失敗以降、オッタルが台頭するまでオラリオの【頂天】にあった鍛冶師。
その正体はかつて狩人の悪夢に囚われた、名も忘れ去られた古狩人の一人。血に酔い、悪夢に囚われ、獣を狩り続けるのみだった男はある時、獣に墜ちた英雄の成れ果てと相見(まみ)える。
男は挑み、戦い、悪夢の中で永遠の狩りに囚われながら、ついに英雄の正気を取り戻し、密かなる月光の輝きを眼にした。だが男は英雄

に敗れ、英雄は一人の狩人に討たれ、月光は持ち去られた。
残ったのは、男の執念。悪夢に囚われた男は、月光の輝きにこそ導きを見出し、それを得ようと足掻いた。〝火薬庫〟の源流、オト工房の粋を盗み、工房の業を我がものとした。そして自らこそが月光を継ぐ者だと、天の月に手を伸ばした。
凡人に有り触れた、自らをこそ特別と思う錯覚。男はそれを求め、何時しか狩人の悪夢から解放されてもなお、求め続けた。
夢から覚め、男は墜ちた。墜ちた先は上位存在（かみがみ）の見守りし穴を穿たれた世界だった。男は蕩けた瞳のまま、求めるものを愚直に追い続けた。
【聖剣】のルドウイーク。どちらも男が名乗ったものではない。二つ名は神が、そしてルドウイークは男の聖剣（さくひん）に刻まれた古い文字より名付けられた。
男はかつて見（まみ）えた英雄のように、傷つき倒れた時のみ正気を取り戻す。そして初めて聖剣を抜き、己がルドウイークの後継だと信ずるのだ。
それがただの仮初と知ってなお。狩りの中でならば、心委ねられるが故に。

という夢を【狩人】は見た。
黎明か夕暮れかも分からぬ月と太陽の狭間。教会の尖塔にぶらさがって寝ていた【狩人】は突如覚醒し、有り得べからざる動きで跳ね起きる。
そうだ、俺は【火薬庫】だ。誰が何と言おうと【火薬庫】なんだ。長

い長い睡眠で程よく蕩けた【狩人】の頭は夢の内容で一杯だった。
【狩人】は走った。目玉の広がる道を踏み潰して駆け、臓物の巡る建築物の間を抜け、屹立する名状し難い巨塔に突入し、下へ下へ突き進んだ。
モンスターも冒険者も関係なく蹴散らして突進する【狩人】。左手に《月光の聖剣》を持ち、さながら聖杯ダンジョンで遭遇した古い人の女の如く手足をバタバタとばたつかせ疾走する【狩人】は、神々が見れば「貞子!?」「貞子だ……」と戦慄した事だろう。
【狩人】は七日七晩走り続け、59階層へ到達した。そこでは平ぺったい胸部の上位者が率いる獣共が獣とも呼べぬなにがしかと戦っている筈だ。
そこへ颯爽と現れ、宣言するのだ。我こそは【聖剣】のルドウイークである！　と。
しかして、59階層の階段を降り切った【狩人】が眼にしたのは。
ひたすらに寒い、いたるところに氷河の流れる凍結の世界だった。
「……」
当然である。【狩人】の耳にした情報はもう何ヶ月も前の話だ。
夢見た夢のままに行動した【狩人】は夢から覚め、そして全てを夢にするべく『狩人の徴』を使うのであった。